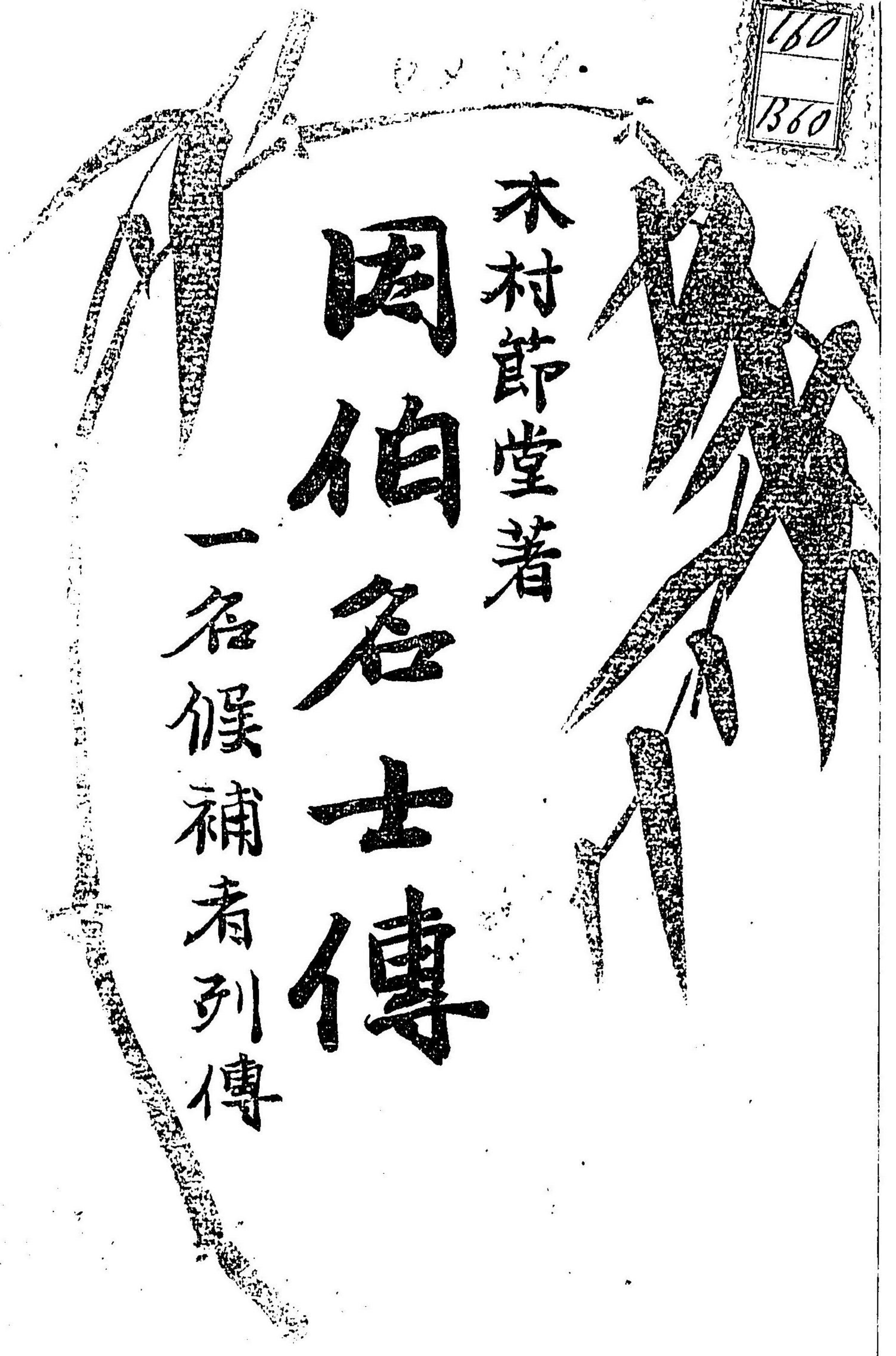


160
1360

木村節堂著

因伯名士傳

一名候補者列傳



№3622/23

特29



自叙

余ノ因伯名士傳ヲ著ハシテ剗刷氏ニ附セントスルヤ偶客

アリ之ヲ觀キ曰ク子ノ著ハス處事ハ即チ詳ナリ論ハ即チ

直ナリト雖モ其人物ヲ評論スルニ單刀直入、直チニ其心

腹ヲ刺シテ鼻モ假借スル所ナク好ンデ人ノ徳ヲ難ス是將

及徳義ノ罪人タルナキヲ得ンヤト、余笑テ曰ク子モ亦此

言ヲオス乎試ニ思ヘ名士ハ美玉ノ如ク眞ニ得難ク俗士ハ

塵芥ノ如ク常ニ途ニ滿テリ駑駘却テ美肉ニ飽キ騏驎空シ

ク伏櫪ニ苦シムハ千古ノ通患ニアラズヤ、況ンヤ波瀾常

ナク變幻定リナキ政治海ニ於テ權謀ノ術譎詐ノ言ヲ利用

シテ公衆ヲ籠絡セントスルハ古今政治家ノ慣用手段ナリ

因伯名士傳

叙一

我邦今ヤ方ニ立憲政体ノ實ヲ舉ゲ議院ヲ開設セントスルノ曉ニ當リ議員撰舉ハ實ニ今日ノ最大急務ニシテ苟クモ其人ノ經歷、性質、持論ニ就キ絲ヲ分テ毫ヲ折キ之ヲ觀察スルニアラサレバ決シテ美玉ト騏驎ハ得ベカラズシテ徒ラニ中原ノ鹿ヲ擧ゲテ姦雄ノ犠牲ニ供シテ止マン而已余ノ此編ヲ著ハス蓋シ之ヲ憂フレバナリ此編未ダ以テ政治家ガ肺肝ヲ觀破スルノ照魔鏡トナスニ足ラザルモ公衆ノ参考ニ供スルニ於テハ社會ノ公益ニ於テ亦少助ナシトセザルベシ余ハ公義ノ爲メニハ甘ンジテ私德ノ罪人タルヲ辭セザルナリ況ンヤ此編ニ記述スル所ハ悉ク公事ニ就テ之ヲ評論シタル而已、他ガ品行私事ノ如キ敢テ之ヲ摘

指セザルニ於テナヤ直言何ゾ忌マン苟クモ公明ナル政治家タルニ於テハ主人公其人モ喜ンデ余ガ言ヲ聞クナルベシ然リト雖モ周公恐懼流言日、王莽謙恭下士時、外部ニ發表スル所未ダ全ク其眞象ヲ判スベキニアラズシテ今日謙恭士ニ下ル者何ゾ他日篡奪ノ姦雄タルヲ知ラシ名士モ亦流言ニ誤マラル、時ナシトセンヤ要スルニ蓋棺而事初定矣余ガ今日ニ非難スル所ヲ以テ果シテ余ノ過言タラシメハ實ニ公衆ノ幸福ナリ余ハ亦甘ンジテ失言ノ罪人タルヲ辭セザルナリト客豁然トシテ曰ク子ガ言可ナリト乃チ記シテ以テ叙トナス

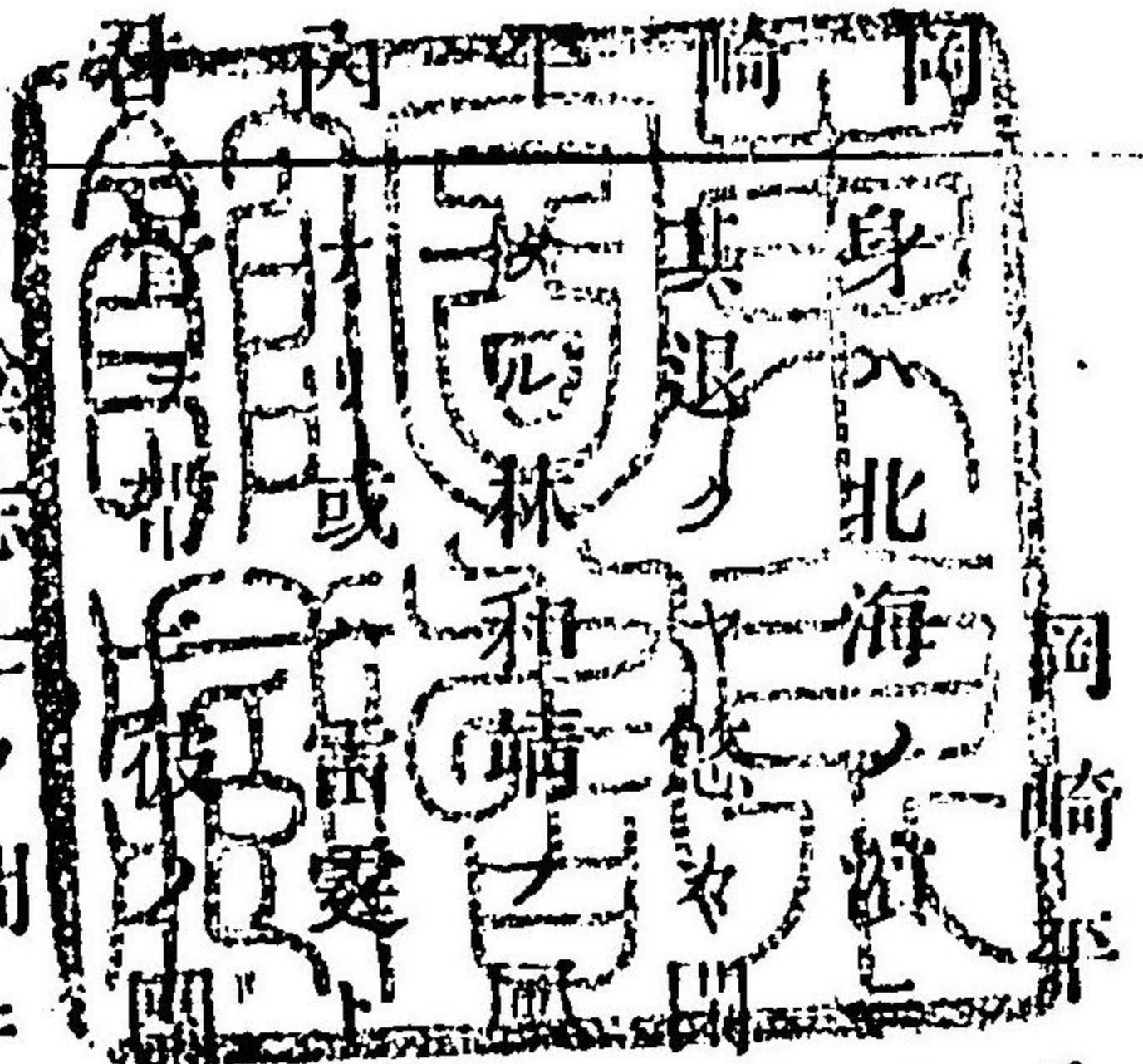
明治廿三年三月於風雲壯懷書屋之櫻花欲開之窓下

節 堂 居 士 識

岡崎平内君	木下莊平君
福井孝治君	藤岡直藏君
若原觀瑞君	中井靜雄君
佐伯友光君	山瀬幸人君
松南宏雅君	加藤正義君
門脇重雄君	森田幹君

因伯名士傳

節堂 木村安藏 著



岡崎平内君
 臥スルモ其心一日モ邦家ノ事ヲ忘レズ
 々鶴ヲ西湖ニ伴ナヒ梅ヲ孤山ニ友トシ
 流ヲ學ビ其進ムヤ龍奮虎騰或ハ疾風ト
 ナリ彼ノ伊國ノ名士ガバルジ一ノ俠
 栗ノ行列ノ如ク群星ノ點々タルガ如キ
 山陰志士ノ間ニ在テ獨リ自ラ卓然トシテ北斗七星ノ高
 キニ居リ氣宇豪邁胸襟落落々家ヲ忘レテ國ヲ憂ヒ財ヲ輕
 シテ賢ヲ禮シ綽々トシテ古英雄ノ風アル者ハ夫レ只

岡崎平内君乎、君ノ家世々鳥取藩主池田侯ニ仕へ祿五百石ヲ食ム君ハ故平内君ノ嫡男ニシテ嘉永元年二月ヲ以テ彼ノ鬱蒼タル久松山下馬場町ノ自邸ニ生ル幼名ハ兵太郎長シテ可觀ト改メ後明治十三年九月父ノ名ヲ繼テ更ラニ今ノ名ニ改ム君ガ明治七年ヲ以テ東京ニ出デ愛國社ニ入り國事ニ奔走シタル時ハ岡崎可觀ト稱セシガ其改名セルヲ以テ今日ニ至ルモ君ガ四方ノ政友中往々山陰ニ岡崎可觀アルヲ知テ岡崎平内アルヲ知ラザル者アリト云フ、君ノ幼ナルヤ身体肥滿膂力人ニ絶グルヲ以テ藩中子弟中ニ在テ常ニ餓鬼大將トナリ惡戯度ナク父母屢々之ヲ叱スレモ聽カズ然レモ寸蛇吞牛ノ氣

岡崎平内君

象ハ既ニ當時ニ現ハレタリト云フ長シテ武技ヲ講シ兵書ヲ讀ム而シテ擊劔走馬ノ技ハ尤トモ其好ム所ナリ、元治元年君年甫拾七歳時ニ藩中勤王ノ論大ニ起リ田村貞彦、河田景典、松田道之等ノ諸名士主トシテ之ヲ首唱シタルニ忽チ反對黨勃興シテ勢ヒ相下ラズ全藩遂ニ正義派、佐幕派ノ二派ニ分裂シ軋輾殊ニ甚ダシク時々鮮血ヲ見ルノ慘狀ヲ呈セシガ當時君蹶然起テ曰ク余輩青年ト雖モ苟クモ君祿ヲ食ム者豈ニ國亂ヲ坐視スベクンヤト晝夜奔走シテ同士ヲ募リタルニ福原力等數十人ヲ得タレバ遂ニ壯士組ヲ組織シテ大ニ勤王攘夷ノ說ヲ唱へ正義派ニ應援シ爲メニ佐幕派人士ノ膽ヲ寒カラシ

岡崎平内君

メタル事勢ナカラザリシ是レ實ニ君ガ國事ニ奔走セル
 行路ノ第一着ナリト云フ、人誰レカ一癖ナカラシ古歌
 ニ曰ク「人を皆か一つは癖を在るもはを我よを許るせ
 志た島は道」況ンヤ尙武ノ國ニ生レ尙武ノ氣豪ニ富ム
 壯士ニシテ武癖アル蓋シ又免ヌガレザル所乎明治五年
 君佛式練兵塾ニ入り小隊司令官ニ在リシトキ隊中一同
 廢刀論ノ起リタルヤ君數名ノ士官等ト相謀テ曰ク士族
 ニシテ佩刀ヲ解ク是レ士氣ヲ衰頽セシムル者ニアラズ
 シテ何ゾ今ヤ國亂漸ク平グト雖モ内外多事未ダ劔ヲ賣
 テ憤ヲ買フノ氣樂世界ニアラザルナリト君自ラ首魁ト
 ナリ大ニ非廢刀說ヲ主張シ議論合ハズシテ同士ト共ニ

岡崎平内君

退整セリ當時政府ノ綱紀未ダ整ハズ政治ノ方針往々民
 心ニ適セザル者アリテ物議稍恟然タリシガ明治七年ノ
 春君モ亦大ニ時事ニ感激シ快々樂マズ錫カニ決心スル
 所アリ單身劍ヲ杖イテ千里遊歴ノ途ニ上リ先ヅ畿内ヨ
 リ東海道ニ至リ足跡ノ赴ク所必ラズ名士豪俊ノ門ヲ叩
 キテ議論ヲ上下シ更ラニ北陸ニ赴キ出羽庄内ノ慷慨家
 某氏ト面議スル所アラント欲シ途次東京ニ出デ舊藩主
 池田慶徳侯ニ謁シタルニ侯、其ノ言色ノ容易ナラザル
 ナ見テ深ク君ノ心事ヲ察シ訓諭懇篤強テ國ニ歸ラシム
 君情義ノ爲メ止ムヲ得ズ空シク大志ヲ抛ツテ歸郷シ
 タルモ君ガ憂國ノ鉄石心ハ益堅ク遂ニ地方團結ノ愈々

岡崎平内君

岡崎平内君

必要ニ迫レルヲ感シ發企員トナリテ二千余名ノ同志ト
 相會シ共立學舎ヲ舊城山ノ麓ニ設立シ傍ヲ士族ノ子弟
 ナシテ日々通學文武ノ術ヲ講ゼシメ他日ノ用ヲ期セシ
 ガ全年ノ末征韓論ノ起ルヤ君共立舎員總代トシテ東京
 ニ至リ愛國社ニ出會シ板垣伯等ノ諸名士ト討議計畫ス
 ル所アリシガ歸郷ノ后ハ益々共立舎ノ擴張ニ盡力スル
 事四年、明治十年西南ノ役起ルヤ或ル地方ニ於テ不穩
 ノ兆候ヲ呈セシ中ニモ鳥取藩ノ士族ハ殊ニ政府ノ注目
 スル所トナリ若シ不平士族輩ガ首領其人ヲ得テ悲筋一
 聲紅旗一タビ動カバ事情未ダ量ルベカラザル者アリシ
 ガ爲メニ舊藩主池田從二位侯幸ニ歸縣ノ上親シク内諭

岡崎平内君

セラレ、所アリタルガ君モ亦心竊カニ時勢ニ察スル所
 アリ縱然志ヲ決シテ區長ノ職ヲ辭シ從軍ヲ出願シ同舎
 ノ壯士ト共ニ縱々タル日章旗ノ下ニ温順ナル義勇兵士
 官トシテ戰地ニ出張スルコトハナリタリ城山既ニ陥リ
 英雄無比ノ老南州モ秋風原頭一片ノ白骨トナリタルヲ
 見テ君ノ感情果シテ如何アリシヤ余輩之ヲ斷言セズシ
 テ讀者ノ判斷ニ任スベシ、君ガ凱旋歸郷ノ日ハ即チガ
 ルバルヂーノ故島ニ歸リタルガ如ク林和靖ノ西湖ニ隱
 レタルガ如ク君ガ生涯ノ行路ニ一段落ヲ畫セルノ時ニ
 シテ曩ノ慷慨家ハ俄然變ジテ老農圃トナリ昔日ノ政論
 家ハ忽地化シテ實業家トナリ君子豹變ノ迅カナル世人

岡崎平内君
 ナシテ一驚ヲ吃セシメタリ、君ノ口、之ヨリ復々兵事
 ナ説カズ君ノ手自ラ卒先シテ桑ヲ植ヘ蠶ヲ養ヒ専心以
 テ縣下殖産興業ノ振起ニ從事シタルモ當時鳥取ハ島根
 縣ノ管下ニアリテ百事不便ノ事多ク大ニ地方ノ盛衰ニ
 影響スル者尠カラザリシヲ以テ君奮然上京シ大政府ニ
 向ツテ鳥取縣再置ノ事、地租改修ノ事、士族授産金下
 附ノ事、道路改修ノ事、築港ノ事、ヲ合セ五個條ノ請
 願ヲナシ尙ホ主務大臣ニ面説スル所アリシガ君ガ此ノ
 五個ノ目的ハ幸ニ漸次實行スル事ヲ得テ鳥取縣士族授
 産會社ノ如キ縣下高草郡加露築港ノ如キ目下皆ナ着手
 中ナリ而シテ君ガ有志ヲ誘導シテ栽桑製絲等ノ業ニ奔

岡崎平内君
 走盡カシタルノ功勞ハ殊ニ縣下ニ公益ヲ與ヘタルモノ
 ナリトテ明治十九年六月柳原賞勳局總裁ヨリ特ニ賞狀
 ナ下附セラレタリ亦以テ君ガ實業ニ熱心ナリシヲ證ス
 ベキナリ、君明治九年區長ニ任ゼラレテヨリ以來屢々
 官職ヲ受ケテ屢之ヲ辭シ其ノ辭スルヤ恰モ破帽ヲ脱ス
 ルガ如ク毫モ戀々スル所ナシ就中日野郡長ニ任ゼラレ
 タル時ノ如キ明治十二年一月十日ヲ以テ其辭令書ヲ受
 ケ全十三日依願免職トナリタル等其去就ノ迅速ナル人
 意ノ表ニ出ヅル者アリ、全十四年三月ニハ島根縣會議
 長トシテ因伯雲石隱ノ五州會議ニ列シ鳥取再置縣後ハ
 更ラニ鳥取縣會議長トナリ全十七年四月鳥取縣邑美、

法美、岩井、郡長ニ任シ從七位奏任官五等ニ叙シタルモ全二十年五月ヲ以テ之ヲ辭シ以來洋犬ヲ伴ナヒ獵銃ヲ肩ニシテ霞湖ノ水、摩尼ノ山ニ鳥獸ヲ逐ヒ暫ラク閑日月ヲ送リタルモ頻繁タル今日ノ世務ハ君ヲシテ永ク久松山下ノ仙人タラシムル能ハズ昨年自治制度ノ施行ト共ニ君ハ鳥取市長ニ擧ゲラレ今ヤ又國會開設ノ時期切迫シタレバ君ハ遂ニ本年一月ヲ以テ辭表ヲ呈出シ彼ノ班超其人ナラザルモ再ビ筆ヲ投ジテ議員テウ鹿ヲ茫漠タル政治ノ郊原ニ追フ事トハナリタリ君ガ今日蹶起シテ駿足ヲ政界ニ試ムルハ決シテ偶然ニアラズ蓋シ當初ノ目的ニ照應スル者ト云フベキナリ今日君ガ無政黨

岡崎平内君

員ナルヲ以テ某生アリ特ニ君ノ門ヲ叩キ問フテ曰ク先生何ノ主義ヲ奉ズルゾト君八字髯ヲ掀シ笑テ曰ク子試ミニ余ガ元治元年以來二十星霜ノ間、國事ニ尽シタル行跡ニ附テ何ノ主義タル乎ヲ判セヨト蓋シ君ガ愛國社會議以來胸中ニ磊々タル一片ノ自由主義ハ凜乎トシテ終始磨殺スルヲナキヲ自信スルノ深キニ因ルナリ、兎ニ角君ハ山陰ノ老龍ナリ今日ニ當リ北海ノ天ニ雄飛シ迅雷ヲ叱シ猛雨ヲ制シ山陰八州ノ草木ヲシテ風靡セシムルノ勢力アル者ハ君ヲ措テ誰ゾヤ

岡崎平内君

木下莊平君

一朝偶然ニモ鳥取縣會議長ノ地位ニアリテ至榮ナル至美ナル憲法發布式ニ列シタルガ爲メ非常ナル名譽ヲ田夫野人ノ間ニ博シタル者ハ木下莊平君ナリ、余輩君ガ温順ナル田舎紳士タルヲ知テ有爲活潑ナル政治家タルヲ知ラズ又君ガ道路請負ニ巧妙ナルヲ聞ケドモ政治法律經濟等治國ノ道ニ於テ何ノ長所アルヲ聞カズ、余輩初メテ君ガ衆議院議員タラントノ希望アルヲ聞キ大ニ驚テ之ヲ八上郡（君ノ在所）ノ有志家某ニ問フ其人揚然トシテ曰ク予知ラズヤ君ハ昨年二月憲法發布式ニ列シタリ故ニ議員ニハ必ラズ君ヲ出サ、ルベカラズト

木下莊平君

余輩益々其言ノ奇怪ナルニ驚ケリ如何ニモ此ノ盛典ニ列シタルハ人生無上ノ名譽タルニハ相違ナキモ此ノ盛典ニ列シタルガ爲メ國會議員タルノ資格能力ニ於テ充分ナリトハ果シテ何ノ理由アリテ存スルゾ余輩此ニ於テ人ハ遭遇ニ因テ幸不幸ノ甚ダシキ懸隔アルノ理ヲ知ルト同時ニ地方人民ガ政治思想ノ極メテ幼稚ナルヲ嘆ゼズンバアラザルナリ、然リト雖モ君モ亦一個ノ老練家ナリ君ノ心事ハ斯カル淺薄ノ者ニアラズシテ必ズヤ深ク自ラ信ズル所ノ者アルハ余輩ノ信シテ疑ハザル所ナリ、君ハ因幡國八上郡布袋村ノ産ニシテ家世々大庄屋ヲ勤メ郡ノ豪族タリ君生レテ穎悟慧敏、動止恰モ成

木下莊平君

人ノ如シ長ズルニ及ンデ鳥取ニ出デ藩ノ儒官正墻適所
 先生ノ門ニ入リテ書ヲ讀ム先生ノ經術文章當時ニ冠タ
 リ而シテ詩文書畫ノ小技ニ至ルマデ一トシテ精妙ナラ
 ガルハナシ時恰モ維新ノ前ニ當リ先生大ニ勤王攘夷ノ
 說ヲ唱ヘ書生ノ文弱ニシテ兵事ヲ解セザルヲ憂ヒ日々
 門生ヲ集メテ孫子ノ兵書ヲ講ゼリ君モ亦當時講筵ニ列
 シ殊ニ九地編ノ始如處女。敵人開戸。後如脫兔。敵不_レ及_レ拒。
 ノ一句ハ君ノ尤モ能ク記臆セルガ如ク君ガ平素ノ慣用
 手段タル變通機應ノ妙所ハ恰モ之ニ類スル者アリテ、
 君ガ蕭々タル半白ノ頭髮ハ老練家ヲ粧ヒ、君ガ諄々乎
 トシテ調子善キ言語ハ温厚君子ノ風アルヲ以テ人其ノ

木下莊平君

胸中畫策ノ微妙ナルヲ知ラザル者有リト云フ、君明治
 十年ヲ以テ高草郡ノ區長ニ任ゼラレ序デ八東郡ノ區長
 ニ任ゼラレタルモ供ニ久シカラズシテ之ヲ辭シ其後鳥
 取縣會ノ開クルニ及ンデ縣會議員ニ撰擧サレ尙ホ常置
 委員ニ復撰サレタリ時恰モ山田鳥取縣知事、須永土木
 課長ガ銳意熱心土木事業ニ汲々タリシ當時ナリ……

君ヤ明治二十一年ヲ以テ隣縣松江ニ關西土木
 會社ヲ設立シ又頻リニ島根縣道路ノ請負ヒテ爲シタリ
 君ガ手ハ果シテ魯陽ノ戈ノ如ク再ビ落日ヲ西山ニ回ヘ
 スヲ得ル乎否聞ク君此頃政治上ノ主義トシテ保守中正

派ナル金看板ヲ掲ゲタリト或ハ疑フ島根縣現任知事籠
 手田君ガ鳥尾將軍ノ知己トシテ保守的臭味ノ人物ナル
 ヨリ君モ亦籠手田君ニ薰陶サレタルニハ有ラザルナキ
 乎ト云フ者アリ未ダ知ラズ孫吳ノ妙用果シテ君ガ目的
 ナ達シ得ルヤ否

木下莊平君

福井孝治君

大才子、大才子、我山陰ニ大才子現ハレタリ此大才子
 ナ何人トナス大同俱樂部員福井孝治君ナリ君ヤ時トシ
 テハ商人トナリ時トシテハ政治家ヲ學ビ時トシテハ代
 言士ヲ氣取り其ノ變現出沒ノ妙ナル人ナシテ其真象ヲ
 知ラシメズ故ニ世人ガ稱シテ權謀家ナリト云フモ亦無
 理ナラザルナリ、余輩ハ未ダ君ノ腕前ノ強弱如何ヲ知
 ラズ學識ノ深淺ヲ知ラズト雖モ其運動ヨリ經歷ヨリシ
 テ又是レ一個ノ政論家ト云ニ於テハ決シテ不可ナルナ
 キナリ、君ハ鳥取縣士族福井孝篤君ノ男ニシテ安政五
 年十一月ヲ以テ千代河畔ノ富桑村ニ生ル君ノ幼時家極

福井孝治君

メテ貧ナリシモ孝篤君ノ教育ニ熱心ナル君ヲシテ普通ノ學科ヲ講ゼシメント欲シ獎勵至ラザルナシ君モ亦性來讀書ヲ好ミ稗史小説尺牘ノ類苟クモ字形ヲ爲ス者ヲ見レバ一讀セズンバ措カズ十八歳ニシテ東京ニ遊學シ某學校ニ入ル學資ヲ給セラル、一月十金漸ク乏レカラザルヲ得タルモ該校役員ノ壓制極メテ甚ダシク生徒ハ學校ノ奴隸タルニ異ラズ、君ヤ性質本ト怯懦ナリシモ此ニ至テ感憤シ斷然一身ヲ犠牲トシテ滿校生徒ガ自由ヲ伸暢セント決心セリ蓋シ二百余名ノ生徒中憤激事ニ當ラントスル者ナキニアラザルモ制裁ノ嚴重ナルヲ以テ挺身事ヲ舉グル者ナカリシナリ君乃チ意ヲ決シ役

福井孝治君

員ニ向テ大ニ時弊ヲ論シ激論連日校幹教師ノ專横ヲ彈効シテ毫モ假借スル所ナシ校長怒リテ君ニ退校ヲ命ゼント欲セシモ滿校二百ノ生徒君ノ義勇ニ感シ奮テ曰ク福井ヲシテ退校セシメントナラバ余等先ヅ此ノ校ヲ去ラント諭セヒ可カズ校長遂ニ君ヲ禁錮三週間ニ處シ事漸ク治マリ後六月ニシテ全科卒業ノ證書ヲ得テ退校シタルガ此時ヨリシテ君ノ性ハ一變シテ勇敢トナリ活潑トナリ壓制ノ忌ムベク自由ノ擴張セザルベカラザルヲ確信シタリト、幾クナラズシテ職ヲ視學ニ奉シ岡山縣ニ赴キ旁ヲ七々雜報ナル政論雜誌ヲ發兌シテ直言讜議時弊ヲ極論シ遂ニ官ヲ免レ明治十三年天下ノ志士相

福井孝治君

結合シテ國會期成同盟會ノ舉アルヤ君奮テ入會シ又岡山毎日新聞ヲ發行シテ只管ラ自由主義ノ擴張ヲ計リタルガ遂ニ新聞條例違犯ノ罪ヲ以テ禁獄六十日ニ處セラレ全十四年彼ノ一時世論ヲ聳動シタル北海道官有物拂下ノ事アルヤ君奮然トシテ演說ニ新聞ニ詭激ノ言論ヲ爲シ集會條例ニ觸レテ罰セララル、事拾六回、且ツ一ケ年政治ノ事項ヲ講談論議スルヲ禁ゼラレタリ、全十五年一月君ガ再ビ言論ノ自由ヲ得タルヤ岡山市野田屋町柳川坐ニ於テ中山寛石黒涵一郎ノ諸氏ト共ニ開キタル政談演說會ニ於テ不幸ニモ中止解散ヲ命ゼラレ電光一閃落花狼藉ノ殺風景ヲ演出シタル珍聞ハ當時都鄙ノ

福井孝治君

新聞ニ記載シテ世人ノ尙ホ記憶スル所ナルガ君ハ本件ニ關シ未決檻ニ繋ガル、一數月遂ニ集會條例違犯トシテ輕禁錮三十日ニ處セララル、此時ニ當リテ君ハ小林楠雄石黒涵一郎ノ二氏ト共ニ山陽自由黨ノ幹事トナリ旁ラ中國日々新聞、中國自由新聞、山陽自由新聞等ヲ發行シテ筆ニ舌ニ自由ノ大義ヲ説キ活潑ノ運動ヲ試ミシカバ忽チ一部ノ反對黨ヲ生シ彼等ガ兇暴至ラザル所ナク屢々新聞社ニ闖入シ屢々君ヲ途ニ要撃セントシタリ、現ニ君ガ領邊ニ印セル凹字ノ瘢痕ハ山陽自由新聞社ニ於テ暴徒ノ白刃ニ觸レタル者ナリト、又新聞社ガ祝融氏ノ災ニ罹リタルヲ前後三回ニ及ベリ君モ亦厄介ナ

人物ナル哉、全十七年君ハ岡山ノ志士忍峽稜威兄氏等ト共ニ岡山ヲ辭シ西京ニ移リテ自由之魁ナル一新聞ヲ發行シ旁ヲ法律研究所ヲ設ケ京坂間ニ於ケル法律ノ業務ニ從事シ明治二十年三大事件建白ノ事アルヤ君ハ京都府有志總代トシテ東京ニアリ屢元老院ニ伺候シ又各大臣議官ノ門ヲ叩キ切論已マズ偶マ保安條例ノ發布ニ逢ヒ二年六ヶ月退去ヲ命ゼラレ爾后京坂ノ間ニアリテ專ラ子弟ノ教育ニ從事シ傍ラ會社ノ役員タリ君ハ素ヨリ自由主義ノ政治家ト稱シテ耻ナザルベキモ君ガ出處ノ變幻出沒多ク人意ノ表ニ出デ變通ノ妙用アルニ至テハ君モ亦是レ政黨員中ノ大才子ナル者歟、君號ハ北涯

福井孝治君

著ス所日本國會論、警世偉言等數種アリ、詩アリ錄ス

失題

頻年奈此國光沈。宿志難賽淚濡襟。動地潮兼憂不遠。蔽天雲與怨何深。五洲每有雄飛夢。孤島元無雌伏心。撫劍長宵誰共語。人生自古少知音。

又

人生在世易蹉跎。奈此滿胸磊塊何。勿怪詩篇偏慷慨。燈前連夜半悲歌。

南船北馬幾間關。淪落異鄉人未還。夜々誰憐飄泊客。夢迷千里舊青山。

福井孝治君

藤岡直藏君

紅顔桃花ニ似タル楊妃ヲ右ニ媚ビシメ婀娜櫻花ノ如キ
 小町ヲシテ左ニ笑ハシメ、主人公其人ハ恰モ金衣公子
 ノ春色ニ戯ムル、ガ如ク両手ニ桃ト櫻ノ美色ヲ擁シ一
 時ニ牡丹餅ト葡萄酒ノ佳味ヲ喰ハントス是レ宇宙無上
 ノ權利ト天下無限ノ快樂ヲ一手ニ壟斷スル者ニシテ快
 ハ即チ快ナルベキモ左リトテハ餘リ氣ノ善キ話ナリ、
 トハ官吏兼任議員ニ附キ世ノ惡口者流ガ常ニ唱道スル
 所ノ舊言ニシテ藤岡君モ亦今日デハ誰レアロウ奏任官
 六等島根縣邇摩安濃郡長トノ肩書ヲ持タセ玉フ貴トキ
 身分ニシテ鹿モ衆議院議員熱望者トシテ候補者ノ一人

藤岡直藏君

藤岡直藏君

ナルヲ以テ口善惡ナキ京童（ドッコイ）田舎童ハ動モ
 スレバ尋常一様ノ看ヲナシ冒頭ノ言ヲ以テ君ヲ評スル
 者アレドモ是未ダ君ノ心事ヲ知ラザル者ナリ余輩深ク
 君ノ爲ニ惜シマザルヲ得ズ、況ンヤ君ハ彼ノ猿猴ガ長
 手ヲ延ベ水底ノ月ヲ把ラント欲シナガラ片手ハ猶ホ木
 ノ枝ヲ離レザルガ如キ醜態ヲ學ブ者ニアラズシテ試ミ
 ニ自家抱負ノ意見ヲ公衆ノ前ニ吐露シ公衆ノ容ル所ト
 ナレバ冠ヲ掛テ野ニ下リ若シ意見ニシテ公衆ニ擯斥サ
 レバ更ラニ席ヲ適當ノ人ニ讓ルベシ、トハ昨年ノ春ヲ
 以テ夙ニ君ノ明言サレシ所ナレバ君ハ一途ニ官吏兼任
 議員ヲ希望スル者ニアラズシテ胸中ノ洒々落々トシテ

藤岡直藏君

無造作ナル更ラニ嘆賞スベキ者アルナリ、君ハ高草郡上原村ノ人ニシテ曾祖父伊兵衛氏ガ郡中取締役ヲ勤メタルヨリ序デ祖父惣五郎氏ハ中莊屋ヲ勤メ世々郡ノ豪族タリ君、安政四年正月ヲ以テ生レ其幼ナルヤ祖業ヲ繼キ專ラ農桑ノ事ニ從事シタリシガ明治八年地租改正ノ際ニ當リ君、等外三等出仕トシテ鳥取縣ニ奉職シタリ是レ實ニ稚龍ノ雨ヲ得タルガ如ク君ガ他日青雲ノ上ニ翱翔スル羽翼ノ將ニ生ゼントスルノ時ナリ、明治九年八月一旦鳥取縣ヲ廢シ島根縣ニ合併セララル、ニ當リ君亦タ島根縣ニ轉勤シタルガ全年十一月隣縣下長門國萩地方ニ於テ殺氣俄ニ迸リ砲聲頻リニ轟キ暴動士族ノ

藤岡直藏君

反旗ハ翻々トシテ青天白日ノ空ニ縦ヘリ島根縣下ノ如キ境域相ヒ接續セルテ以テ動モスレバ茶毒ヲ蒙ルベキノ虞ナキニアラザリシガ君當時其間ニ幹旋鞅掌シ殊ニ勉勵シタルヲ以テ官爲メニ酒肴料ヲ賜フテ之ヲ賞シタリ、爾后累年累進シ明治二十年五月ニハ判任官六等ヲ以テ第一部農商課長ニ任セラレ全二十二年ニハ五等ニ進級シ全廿二年五月ニハ郡長試験ニ當撰シ遂ニ今日ノ現職ニ至リタルハ實ニお手柄ノ至リト申スベキナリ、君明治八年初メテ高草ノ草廬ヲ這出デ、官海ニ漕ギ出セシヨリ今日迄官職ニ在ル事一日ノ如ク其間年ヲ閱スル十有六、月ヲ閱スル百九十二、日ヲ筭スレバ五千八

藤岡直藏君

百四十日ノ多キニ及ベリ、之ヲ彼ノ學課ニ比センカ就
 學兒童ガ小學ニ在テ絲、犬、錨、ヲ啣晤セシヨリ順次
 進級シ大學院ヲ卒業スル迄ノ日子ニ充ルモ決シテ不足
 ナ感ゼザル程ナリ、果セル乎官衙ハ君ノ爲ニハ好學校
 トナリ事務ハ君ノ爲ニハ好學課トナリ之ニ薰陶シ之ニ
 經驗シ遂ニ今日ノ藤岡君其人ヲ成就シタリ然リ而シテ
 直モ手ヲ延バシテ水底ノ月否中原ノ鹿ヲ獲取セントス
 君モ亦タ多福ノ人ト云フベキナリ、聞ク君昨年春初ヲ
 以テ歸省シ此頃再ビ歸省シタルニ君ノ人物ハ俄然豹變
 シ曩ノ嚴カメシキ官吏風ハ質素ナル田舎風ト化シ曩ノ
 揚々トシテ嚴格ナリシ唇ハ俄カニ滑稽洒落ノ言ヲ吐テ

藤岡直藏君

俗人ヲ喜バシムル杯君ノ親戚故舊スヲ君ガ豹變ノ迅速
 ナルニ驚ク程ナルガ中ニモ先月高草郡民ガ君ノ爲メニ
 大懇親會ヲ同郡中教院ニ於テ開キタル折君ガ手織編ノ
 疎末ナル綿服ヲ着ケ股引脚半ニ草鞋ヲ穿テテ出席シタ
 ル等ハ豹變中ノ尤トモ甚ダシキ者ナリト、史ニ稱ス昔
 者ナボレヲシ第一世ガ既ニ爭亂ヲ一掃シ佛、伊兩國ノ
 帝位ヲ兼テタル時再ビ伊太利ニ赴キ舊將士ヲ延見スル
 ニ當リ自ラ舊軍袍ノ櫛風沐雨ノ難ヲ經、刀痕銃痕ノ爲
 メ亂離滅裂セル者ヲ纏ヒ大ニ將士ヲシテ懷舊ノ感情ヲ
 起シ嗚采隨喜ノ涙ニ咽バシメタリト今藤岡君ガ一隻ノ
 草鞋、果シテ郡民ノ嗚采ヲ博シタリトスレバ君モ亦高

藤岡直藏君

草ノ小ナボレナント稱スベキ乎、然リ而シテ余輩ハ君ニ於テ特筆大書シテ稱揚セザルヲ得ザル一事アリ何ゾヤ曰ク此ノ高草ナボレナシガ各候補者ニ先ダツテ公然撰舉人ニ向ヒ自家ノ主義目的ヲ發表シタルノ一事ナリ、然レモ其主義ニ於テハ余輩頗フル服セサル者アルナリ君ハ主義トシ大書シテ曰ク「忠愛不偏」ト余輩政治上ニ於テ自由主義アルヲ聞ク保守主義アルヲ聞ク自治主義中正主義等ノ文字アルヲ見ル然レモ如何ナル政治書ヲ搜索スルモ未ダ曾テ忠愛不偏主義ナル政治主義ノ何ノ國ニ行ハレ何ノ政黨ニ奉ゼラレタルヲ知ラズ果シテ然レバ是レ君ガコロソボス流義ノ新發明主義ナル乎

藤岡直藏君

君ノ説明中仁義禮節宗教美術ノ國粹ヲ保存ストアルニ依レバ或ハ國粹保存トカ云ヘル物ノ一派ナル乎然レモ君ヨ君ヨ試ニ思ヘ今日我邦ノ政黨孰レノ政黨カ不忠ナルゾ不愛ナルゾ偏頗ナルゾ何レノ主義カ不忠ナルゾ不愛ナルゾ偏頗ナルゾ自由ト云ヒ大同ト云ヒ保守ト云ヒ其名ニ於テ異ナル所アルモ苟クモ一主義ヲ掲ゲ一身ヲ邦家ノ犠牲ニ供シ運動スル者ハ何が爲メゾヤ即チ忠君愛國ノ實ヲ舉ゲ以テ皇室ノ尊榮ヲ計リ國家ヲ泰山ノ安キニ置キ兼テ專制偏頗ノ弊ヲ洗滌シ公明正大ノ政治ヲ希望スル者ニアラズヤ況ンヤ忠君愛國ノ心情ハ恐ラク日本臣民トシテ一人モ有セザル者ハアラザルベシ果

藤岡直藏君

シテ然レバ君ノ所謂忠愛不偏ハ日本臣民一般ノ通性ノ
 ミ決シテ之ヲ稱シテ政治上ノ主義トハ云フベカラザル
 ナリ君以テ如何トナス乎君ヨ君ヨ彼ノ保守黨ガ常手段
 ナル鬼面ヲ被テ小兒ヲ恐喝スルノ輩ニ倣フ勿レ、而シ
 テ特ニ説明書中目今ノ情勢俄ニ真正ノ政黨ヲ望ムベカ
 ラズトテ今日ノ政黨ヲ擯斥シタルニ至テハ余輩更ニ君
 ノ大胆ニ驚カザルヲ得サルナリ、知ラズ君ガ政黨ヲ看
 察スル眼光モ序デニ今少シ豹變セシメテハ如何ノ者ニ
 ヤ敢テ五相談申スナリ

若原觀瑞君

若原觀瑞君

日本ノ國粹トハ民俗淳朴ニシテ機智ニ富ミ義ニ勇ミ
 美術的ノ觀念ニ長ス而シテ粹ノ最モ粹ナルモノハ忠
 君愛國ノ思想是也

如是ノ國粹ハ開闢以來ノ歴史、地理、風俗、習慣、
 風土、氣候、山川、草木及宗教ノ感化力ヨリ發生ス
 ル所ノ者也

我輩ハ此國粹ヲ發達助長シテ國權、公權、私權ヲ鞏
 固擴張セント欲ス是即日本ノ精神ヲ以テ日本ヲ維持
 セント欲スル者也

我輩ノ反對者ハ歐米拜崇主義、模倣塗抹主義等ノ如

キ日本ノ精神ニ傷ケ以テ歐米ニ化成セント欲スル者
是也

若原觀瑞君

トハ君ガ曾テ發表シタル主義ナリトテ地方新聞ニ記載
セル所ナルガ余輩ハ此ノ傷句イナ御文章ヲ讀一讀シテ
尚ホ抹香臭キ香ノ鼻孔ヲ衝クヲ覺ユルナリ然レモ余輩
ハ敢テ政治上ノ主義ヲ以テ之ヲ論辨スルヲ喜バズ如何
トナレバ余輩ハ縦カラモ横カラモ、政治家ヲ以テ君ヲ
目スル能ハサレバナリ、君ヤ元伯州河村郡長瀬宿勝福
寺ノ住職ニシテ佛家ニ生長シ佛家ノ教育ヲ受ケタル人
ナレバ魯智深其人ノ如ク腥坊主トナリテ政治界ニ狂ヒ
廻ラズモ數聲ノ清磬、一縷ノ香烟ノ間ニ君ノ耳ヲ清シ

若原觀瑞君

君ノ心ヲ洗ヒ彼ノ西行ノ如ク日蓮ノ如ク親鸞ノ如ク善
智識高僧ノ流レテ波ミ白雲高於青雲高ト濟シ切り流水
千谿月。寒巖一樹松。其間ニ經ヲ講シ法ヲ説キナハ縦
シヤ龍ハ降ラズトモ獅子ハ聽カズトモアレ君モ亦タ一
個非凡ノ僧侶ナルベキモ試ニ見ヨ梨園ノ千両役者、角
力社會ニ入レバ半兩ノ價值ナキノミナラズ却テ一個犢
尾禪担ギノ邪魔者タルヲ免レズ、是レ其學ア所ノ異ナ
レバナリ、然ルニ君ハ何スレゾ西行ガ銀猫ヲ投シタル
ノ古轍ハ踏ズシテ圓顛頭上三寸ノ毛髮未ダ延ビザルニ
早クモ俗世界ニ混シテ鹿ヲ争ハントスル哉、何スレゾ
君ニ於テハ清淨安樂ナル宗教界ヲ去テ此ノ熱鬧ナル煩

若原觀瑞君

雜ナル君ニ於テ不適當ナル法律ガ僧侶ニ禁止シタル政
 權ヲ争ハントスル哉、蓋シ百八ノ煩惱未ダ去ラザル者
 アル乎或ヒハ余輩ノ知ルベカラザル佛家ノ方便ナル者
 アルガ故乎、聞ク君ガ年齒三十有二智略アリテ辨舌ニ
 長シ僧侶中ノ才子ナリト年少ニシテ漢籍ヲ備中ノ鴻儒
 山田方谷翁ノ門ニ講シ續デ内外ノ典籍ヲ西京ニ修メ後
 東京ニ遊ビ島地黙雷師ニ從テ佛說ヲ聞キ當時ノ僧侶名
 士ノ間ニ交遊シ大ニ得ル所アリシガ彼ノ後藤伯ノ幕賓
 トシテ鏘々ノ聞エアリシ管了法氏ノ如キハ君ガ同窓ノ
 知己ナリト聞ケバ今回ノ舉モ或ヒハ管氏ノ勸誘シタル
 ガ爲メナルベシトノ風說アリ、然レモ君ハ或人ニ書テ

若原觀瑞君

贈テ終身草裡ニ埋没シテ空ク窮死致候歟又ハ天涯ニ雄
 飛シ功名ヲ竹帛ニ垂ル、歟他人ノ不得知耳ナラズ小生
 自ラモ不知處ニ御坐候（中畧）小生ハ生來深ク原因結
 果ノ真理ヲ信居候ヘバ畢世ノ行爲ハ渾テ此ノ真理ニ照
 鑑シテ誠意専心原因ノ處ニ向テ碎勵努力仕リ忠君愛國
 ノ本分ヲ尽サント欲スル耳功名富貴ハ強テ期スル處ニ
 無之候ト明言サレタルガ君ガ運動ノ行爲ニ比照セバ如
 何ノ者ニヤ余輩之ヲ斷言セズシテ公平ナル輿論ニ問ハ
 ント欲ス

中井靜雄君

君ハ鳥取縣會ノ古參株ニシテ隨分議事ニハ練熟シタル人ナリ君ガ領ニ茸々タル關羽然タル美髯ハ流石鳥取縣會議長ノ椅子ヲ占ムルモ羞カシカラヌ風采アリ然レモ未ダ知ラズ君ガ胸間ノ青龍刀ノ斬レ味デ果シテ如何ヲ、聞ク君モ亦候補者ノ一人ナリト然レモ從來君ガ名ノ政黨歴史ニアラザリシヲ以テ某記者アリ君ニ叩クニ政治上ノ主義ヲ以テス君答テ曰ク主義ハ未ダ確定セズト余輩ハ美髯政治家ノ淡泊ニシテ無頓着ナルニ驚歎セズンバアラズ之ヲ以テ君ノ一班ヲ知ルベキ乎、君ハ天保十一年十二月ヲ以テ伯州八橋郡八橋驛ニ生ル幼名ハ恒

中井靜雄君

二郎父ヲ重録ト稱ス君幼ニシテ教育ヲ家庭ニ受ケタルモ家素ト富有ナルヲ以テ長ズルニ及ンデ日野郡ノ儒生伊藤宜堂氏ヲ招聘シ同村ニ有隣塾ナル一學舍ヲ設置シテ文ヲ修メ學ヲ講シ傍ヲ同村ノ子弟ヲシテ就學セシメタリ君明治三年七月ヲ以テ鳥取藩ヨリ八橋郡大莊屋役ヲ命ゼラレ全五年二月ニハ全郡長ニ任ゼラレ爾後明治八九年ニ至ルノ間或ハ學區取締ヲ拜命シ或ハ縣ノ出仕ニ任ゼラレ碌々トシテ吏員ノ間ニ在リタルガ明治十一年七月府縣會規則ノ發布セララル、ヤ君八橋郡ヨリ縣會議員ニ撰出サレタルモ全年十一月區長ニ拜命シタルヲ以テ之ヲ辭シタルガ全十四年十二月再ビ鳥取縣會議員

中井靜雄君

ニ撰出サレ全十五年一月常置委員ニ復撰サレ全十六年六月更ラニ副議長ニ舉ゲラレ全十八年十二月三タビ鳥取縣會議員ニ當撰シ遂ニ縣會議長ノ椅子ヲ占ムルトナリタリ此間ユソ實ニ君ガ一生ノ名譽ニ光輝ヲ放テタル時ナリ全廿二年二月四タビ鳥取縣會議員ニ撰出サレ今尙ホ現任中ナリ然ルヲ今ヤ君ハ一躍シテ衆議院ノ中堂ニ上ラントス未ダ知ラズ美髯政治家ガ如何ナル方略ヲ探テ得隴望蜀ノ大望ヲ達セントスル乎

佐伯友光君

佐伯友光君

英雄傑士ノ妙所ハ奇矯卓落ノ間ニ存シテ温厚着實ハ其本色ニアラズ政治家ノ伎倆ハ經綸畫策ノ妙所ニアリテ區々タル毫端毛髮ノ末ニアラズ故ニ彼ノ「劔一人敵何足學。足記姓名書亦迂。」ト怒鳴リタル維新ノ壯士モ獨リ陳腐ナル項羽ノ法螺ヲ學ビタルニアラズシテ彼モ亦タ一個具眼ノ男子タルヲ證スヘキナリ、佐伯君ハ如何ナル人物ゾ之ヲ月旦スルニ先テ此ガ生涯ノ經歷ヲ描出スヘシ、君名ハ友光字ハ隆卿松石逸史ト號ス豐之丞春之丞太郎等皆ナ其ノ幼名ナリ弘化四年二月ヲ以テ伯州八橋郡赤崎驛ニ生ル君ノ祖佐伯正庵ガ刀圭ノ業ヲ同驛

佐伯友光君

ニ開テヨリ以降君ノ父友長ニ至ル迄豪族タルノ故ヲ以テ累代郡ノ長職ヲ襲ギタルガ君ノ家ヲ繼グニ及ンデ藩主ニ乞ヒ藩藉ヲ脱シテ農ニ歸セリ君人ト爲リ温厚着實ニシテ徳義ヲ重ンジ其人ニ接スルヤ更ニ城府ヲ設ケズ家人ニ對シテ曾テ怒聲ヲ發シタルコトナク淳々乎トシテ郷先生ノ風アリト而シテ讀書ト揮毫ハ君ガ尤モ嗜好スル所ナリ此ノ二者ハ殆ンド君ノ生涯ヲ爲ス者ニシテ此ノ嗜癖ハ早ク三四歳ノ時ヨリ發シ毎曉褥上ニ筆硯ヲ弄スルヲ常トセシガ稍長シテ稗史小説ヲ愛讀シ忠臣義士烈婦孝子ノ言行ヲ讀ム毎ニ動モスレバ天明ニ達スルコトアリ、長スルニ及ンデ川合保、樋野含齋等ノ諸先輩ニ

佐伯友光君

從テ和漢ノ學ヲ修メ鳥取藩士富山信孝ニ就テ砲術ヲ學ビ又吉野櫻之助ナル者ニ從テ擊劍ヲ學ビ明治五年京坂ノ間ヲ往來シ諸大家ニ從遊シ大ニ得ル所アリタリト、君ノ性ヤ斯ク淡雅風流ナリト雖モ亦祿仕セザルニアラズ元治元年六月ニハ因州藩砲臺取締方ヲ命セラレ明治五年八月八橋郡長ニ命セラレタルヨリ尋デ全七年四月マデ戸長又ハ區長ノ煩務ヲ執リ全十二年二月ニハ會見郡書記ニ任セラレタルモ直チニ之ヲ辭シ全年四月島根縣八橋郡撰出縣會議員ニ當撰シタレモ全年七月汗入八橋郡書記ニ任シタルヲ以テ之ヲ辭シタル以後明治二十二年二月ニ至ルノ間四回モ縣會議員補缺員ニ當撰シタ

佐伯友光君

リト君亦々献金施與ヲ好ミ或ハ各種ノ献金ヲ爲シ或ハ
 學校ニ義捐シ或ハ貧民ニ米金ヲ施與セル等ノ事枚擧ニ
 暇アラズシテ爲メニ賞典ヲ受ケタルヲ拾貳回、銀盃ヲ
 賜ハル一箇木盃ヲ賜ハル十四箇ノ多キニ及ベリ是レ殊
 トニ君ガ特有ノ美德トシテ特筆大書スヘキ者ナリ然リ
 而シテ臨池翰墨ノ業ハ君ノ尤モ好ム所ニシテ初メ董其
 昌趙子昂等元明間ノ法帖ヲ愛摸セシガ今ヤ進ンデ懷素
 二王ノ室ヲ窺ハントセリト余輩不幸ニシテ未タ君ノ墨
 跡ヲ一見セザルヲ憾ムナリ、君ハ文園墨林ヲ以テ無上
 ノ安樂國トスルヲ以テ常ニ一書室ニ端坐シテ書ヲ摸シ
 卷ヲ開キ嚴寒ニ爐セズ盛夏ニ扇セズ黽々トシテ古儒ノ

佐伯友光君

餘風アルハ郡人ノ驚奇スル所ナリト噫君ノ行ヤ方ナリ
 君ノ徳ヤ美ナリト雖モ余輩ハ斷シテ君ニ許スルニ政治
 家ノ三字ヲ以テスル能ハズ然リト雖モ君ガ好文士タリ
 郷先生タルニ於テハ亦是レ縣下ノ鏘々タル者乎詩歌ア
 リ併録ス

失題

賢愚相同稟性初。染成習慣漸難除。小人懷玉自招罪。廉
 士斷金能取譽。

寄弓懷舊

垂乳根にお志を常よ河津を弓

父代勳媛引あてまき

山瀬幸人君

我君獨リ櫻花ノ美ヲ愛スルナク并セテ松竹ノ節ヲ愛セ
 ヨトハ昔時管公ガ時弊ヲ慨歎サレタル名言ニアラズヤ
 、今モ昔シモ同シ浮世ノ人心、翩々タル浮薄ノ徒世ニ
 愛セラレテ骯髒タル氣節ノ士常ニ容ラレズ峭直ノ言ハ
 棄テラレテ諂諛ノ言用ヒラル此ヲ以テ滔々時流ヲ追フ
 ノ輩勉メテ其言ヲ銜ラヒ其貌ニ媚ビ互ニ相ヒ後クレザ
 ランコヲ欲ス其醜休ヤ卑娼賤妓ト撰ムナク殆ンド人ヲ
 シテ一見嘔吐ヲ催サシメントス咄々怪事時弊ノ極何ゾ
 夫レ此ニ至レルゾ遂ニ一世ヲ舉ゲテ無腸才子、無氣力
 男子、白粉有志家ノ集會所トナシ骯髒氣節ノ士ヲシテ

山瀬幸人君

山瀬幸人君

跡ヲ今日ニ絶タシメントス豈ニ亦慷慨悲歎ノ極ナラズ
 ヤ此ノ浮薄者流ノ間ニ在テ萬綠枝頭紅一點苟クモ些少
 ハ氣節ヲ有シ寸分ノ士氣ヲ存シ時流ニ染ザル者アラ
 乎伎倆ト才學ノ如何ヲ論ズル迄モナク直チニ名士ト稱
 スルヲ得ベキナリ、余輩初メ山瀬幸人君ノ如何ナル人
 ナルヲ知ラズ客ノ東伯ヨリ來ルアル毎ニ余輩必ラズ叩
 クニ該地ノ有志家ヲ以テスレバ客必ラズ君ヲ舉ゲテ答
 フ余輩初メ全ク之ヲ信セズ聞クコノ多キ久フシテ漸ク
 之ヲ信シ謂ラク君ハ必ラズ才子ナルベク學者ナルベク
 雄辨家ナルベシト錫カニ其風采ヲ想ヘリ然ルニ恰モ好
 シ明治二十一年ノ末ヲ以テ君等ガ鳥取新地劇場ニ於テ

政談演說開會ノ舉アリシヤ是レ實ニ君ヲ試験スルノ好時機ナリト馳セ到レバ聽衆凡ソ六七百人、三四ノ辨士交ル／＼壇ニ上テ演說シタル後一人ノ壯士アリ壇上ニ現ハル衆曰ク倉吉有志家ノ巨擘山瀬君出ヅト余輩驚テ仰ギ見レバ年齢三十五六ニシテ色小黑ク容貌疎野ナル一男子身ニ短衣疎服ヲ着ケタルガ壇上ニ突立テリ余輩之ニ於テ一驚ヲ吃シタルモ謹ンデ其演說ヲ聽クニ辨舌澁リテ言語明晰ナラズ加フルニ滿場極メテ騷々シク爲メニ論旨ヲ聞取ル能ハザリシカバ茲ニ再ビ一驚ヲ吃シ氏ガ倉吉地方ニ於テ有志家ノ巨擘タル價值ハ果シテ那ノ邊ニ存在スルヤヲ疑ヒタリ、之ヲ履歷ヨリ論ズルモ

山瀬幸人君

君ハ鳥取縣士族ニシテ久シク東伯地方ニ學校教員タリシガ其後地方ノ豪族岩本廉造氏ヨリ妻ヲ娶リ一旦身ヲ農桑ノ間ニ委シタルガ明治十八年ニ至リ蟄龍雨ヲ得テ鳥取縣會議員ニ飛出シタル迄ニシテ未ダ之ヲ以テ君ガ價值ヲシテ重カラシムルニ至ラザルナリ、君ハ又從來政黨ニ加入シテ運動セズ獨リ加入セザルノミナラズ從來ニ於ル各種ノ政黨ハ皆盡ク不必要ノ者ナリトハ君ガ大胆ニモ常ニ人ニ向テ公言スル奮語ナリト果シテ然レバ君ガ今日ノ名譽ト勢力ハ何物ヨリシテ獲得シタルゾ是レ幸人ノ幸人タル所以ニシテ君ガ多福多幸ノ人ナルニ因ル乎、否々決シテ然ラズ、名ハ實ノ賓ナリ其實

山瀬幸人君

山 瀬 幸 人 君

ナクシテ其名豈ニ空シク來ランヤ、聞ク君ノ人トナリ
 磊落豪放ニシテ毫モ偏幅ヲ修メズ權貴ヲ憚ラズ能ク其
 ノ言ハント欲スル所ヲ言ヒ能ク其行ハント欲スル所ヲ
 行ヒ氣節昂然獨リ白粉有志家ノ上ニ卓然トシテ時流ニ
 異ナル者アリト噫々君既ニ此美德アリ丈夫苟クモ些ノ
 氣節アレバ則チ天下ノ名士タルニ耻ヅルナシ何ゾ獨リ
 倉吉ノ志士ト云ハン乎、余輩茲ニ於テ曩日ノ疑團初メ
 テ氷解スルコト得タリ、今日ノ時ニ於テ山瀬君其人ノ
 如キハ櫻花ノ艶ナキモ松竹ノ節ニ於テハ歛然タルナキ
 者乎否乎

松南宏雅君

松 南 宏 雅 君

君ハ鳥取縣士族ニシテ伯州汗入郡高麗村大字今津村ニ
 生ル父ハ徹翁君ト稱シ藩ノ郷士タリレガ夙ニ勤王正義
 ノ説ヲ唱ヘ殊ニ大砲術ニ長シタルヲ以テ維新ノ前ニ當
 リ勉メテ志士ノ間ニ奔走シテ交テ天下ノ豪傑ニ結ビ常
 ニ脾肉ノ肥ユルヲ歎シタルガ慶應四年ノ秋奥羽ノ役起
 ルヤ徹翁君ガ一片慷慨ノ志ハ禁ゼントシテ禁ズル能ハ
 ズ乃チ宏祐宏雅ノ二兒ヲ膝下ニ招テ曰ク男兒功名ヲ爲
 スノ時到レリ汝等二人年幼ク鬚眉未ダ生セズト雖モ亦
 丈夫ノ兒ナリ余汝等ヲ將イ義旗ヲ翻ヘシテ戰地ニ臨マ
 ントス汝等ノ意如何ト二兒欣然トシテ從軍ヲ乞フ此時

松南宏雅君
 宏祐君年十八ニシテ宏雅君ハ實ニ十六歳ノ青年ナリキ
 父君大ニ喜ビ即夜檄ヲ飛バシテ農兵ヲ募リタルニ健
 兒百余人ヲ得タレバ乃チ分テ二隊トナシ二兒ヲシテ之
 ガ隊長タラシメ意氣凜然千里馬ヲ飛バシテ直チニ奥羽
 地方ニ到リ官軍ニ屬シテ各地ニ轉戦シ父子頗ブル奇功
 ナ奏シタルハ當時傳ヘテ以テ美談トセリ宏雅君モ從軍
 戦功ノ廉ヲ以テ舊鳥取藩主池田慶徳侯ヨリ祿七十石ヲ
 賜フテ之ヲ賞セラレタリ、其後君ハ一旦藉チ東京ニ移
 シタルモ敢テ長裾ヲ權門ニ引クヲ喜バズ紅塵十丈繁
 華ノ地ニ在テ市隱ヲ試ミタルモ民間ノ公務ハ終始君ヲ
 驅テ太平閑人タル能ハザラシメ明治十四年以降君ガ住

松南宏雅君

所タル本郷區内ノ公務ハ悉ク君ノ担任スル所トナリ全
 十七年ニハ東京府々會議員并ニ東京米商會社支配人ニ
 撰舉サレタルガ其后公務ハ一日モ君ヲシテ閑ナラシメ
 ズ君ガ現今ニ担任スル者ヲ列舉スレバ東京府々會議員
 、東京市名譽職參事會員、東京市々會議員、東京市本
 郷區々會議員、全學區委員、全所得稅調查委員、東京
 市徵兵參事員ノ七職ヲ帶ビ其ノ肩書ノ長キニハ法勝寺
 ノ入道ヲシテ三舍ヲ避ケシムベシ、聞ク君ハ左程ノ學
 者ト云フニアラザルモ沈着温厚ニシテ老練家ノ風アリ
 議論ハ敢テ活潑ナラズ高妙ナラザルモ精到確實ナルノ
 點ニ至テハ時流ニ卓然タル者アリト現ニ某新聞ニ記載

セル東京市會議員月旦ニ君ヲ評シテ十二番松南宏雅氏
 熟達能辨聞クベキ説多シトアルニ就テモ其一班ヲ推知
 スベキ歟、君ハ從來政黨ニ加入セズ中立ノ地位ニアリ
 ト雖モ責任内閣ヲ實行スルヲ郡長公撰説等ハ君ガ熱心
 ニ主唱スル所ナリト知ラズ君モ亦一種ノ新保守黨員ナ
 ル歟

君 雅 宏 南 松

加藤正義君

將種何期絕代功。柳陰牛背出英雄。五湖烟水空濛雨。春在
 風雲變黷中。トハ小山巢雲先生ノ妙句ナリ、余輩亦曾テ
 西伯ノ地ニ遊ビ略々其地理風土ヲ記臆セリ錦浦ノ烟波
 何ゾ渺茫タル簸川ノ長流夫レ滔々タリ白蘆青柳其光景
 何ゾ五湖ニ減ゼンヤ其間牛ニ跨リ馬ヲ牧スルノ童子亦
 幾十百人ナルヲ知ラズ然ルニ當時獨リ怪ム西伯地方ニ
 於テ未ダ曾テ牛背ノ英雄猿郎其人ノ如キ者ノ出デザル
 ヲナ、然ルヲ今ニシテ初メテ小太閤ノ既ニ日野郡ヨリ
 飛出シタルヲ知レリ柳陰牛背英雄ヲ出スノ一句眞個
 ニ余輩ヲ欺カザルナリ、小太閤トハ何人ゾ世人之ヲ知

君 義 正 藤 加

ラント欲セバ試ミニ伯州日野郡地方ニ遊ベ牛ヲ追フノ
 老爺馬ヲ牧スルノ儉父相語テ言ハン「政が悴はいかゝる
 出精したさうじや月給の百圓も貰ふと云じやなるかい
 剛氣に出かしたもんじや」ほんに彼の源太は太閤様の
 生れ變りだらうノーだが……ト三々五々相語テ行
 クヲ聞クナルベシ何ゾ計ラン此源太トハ誰アロウ曩ニ
 農商務權少書記官ヨリ日本郵船會社理事ニ轉任セル加
 藤正義君其人ナラントハ政藏トハ君ノ父ニシテ源太郎
 ハ君ノ幼名ナリ君ガ從來ノ經歷ヲ寫シ來レバ儉父モ爲
 ニ起ツベク田夫モ爲ニ奮フベク實ニ一部ノ東洋立志篇
 ナ補フベキモノアルナリ、君ハ嘉永七年二月ヲ以テ伯

加藤正義君

加藤正義君

者國日野郡別所村ノ田家ニ生ル家素ヨリ貧ニシテ只ダ
 牛ヲ追ヒ馬ヲ牧スルヲ以テ家業トナスノミ君ノ家既ニ
 素封ニアラズ門閥ニアラズ故ニ君ノ幼ナルヤ固ヨリ文
 武ノ教育ヲ受クル能ハズ年十五六ニ至ルマデ日々村童
 ニ伍シ山ニ入テハ草ヲ蒔リ田ニ出テハ牛ヲ追ヒ彼ノ横
 笛一聲眠牛背ノ境界ヲ渡リタルヲ以テ一般牧童ト同シ
 ク敢テ人ヲ驚カス程ノ行ヒモナク身ニ日角黒子ノ奇相
 ナケレバ父母ニ蛟龍ヲ見タルノ瑞兆アルニアラズ只ダ
 碌々トシテ田間ニ生長セルヲ以テ仮令ヒ高島吞象翁ノ
 筵ヲ仮ルモ其ノ當時誰レカ君ノ今日アルヲト知センヤ
 明治四年八月君初メテ鳥取藩ヨリ租稅取調ノ命ヲ受

加藤正義君

ケタルガ是實ニ君ガ吏班ニ列シタルノ端緒ナリ全六年十一月置賜縣ニ轉任シテ判任官ニ昇等シ全九年八月迄同縣ニテ地租改正、地籍編纂、歴史編輯、土木事務等ヲ担任シ屢々事務勉勵ノ爲メ褒賞ノ典ヲ蒙ムレリ、次デ山形縣ニ轉シ居ルヲ三月ナラズシテ全年十一月兵庫縣ニ轉任シ勸業、地理、租稅、土木、及ビ詞訟事務ヲ担任シタルガ兵庫縣ハ實ニ君ノ爲メノ好龍門タリ君ガ今日アル既ニ根源ヲ此時ニ發セシナリ君ノ該縣ニ在ルヤ偶々現任鳥取縣知事武井正氏ノ令兄タル武井某氏甚ダ加藤君ノ才子然タル伎倆ヲ信愛シ頗フル之ヲ寵用シ爲メニ幹旋盡カヌル所尠カラズ遂ニ妻ハヌニ女ヲ以

加藤正義君

テシタリ、君亦頻リニ陞叙セラレ遂ニ全十八年六月ニハ兵庫縣屬ヨリシテ一足飛ビニ農商務權少書記官ニ任ゼラレ世人ヲシテ一驚ヲ吃セシメタルガ全九月ニハ農商務卿ノ命ニ依リ非職森岡農商務少輔ヲ補佐シテ日本郵船會社創立ノ事ニ從ヒ二十二年四月ニハ全會社ノ理事ニ任ゼラレタリ誰レカ圖ラン昔日牛背ノ兒童、今日威嚴赫々タル一貴顯タラントハ君ノ生涯ハ之ニ到テ彼ノ豐太閤ガ關白ノ地位ヲ占メタルガ如ク一身ノ光榮多福實ニ極レリト云ベキ歟日野郡民ノ艷稱スル實ニ故アルナリ聞ク君昨年ヲ以テ郷里ニ歸省スルヤ直チニ家ニ歸ラズ西伯ノ豪商近藤喜八郎氏ノ邸ニ僑居シテ父ナル

加藤正義君

政藏君及ビ同胞舊故等ヲ招キテ對面アリタルニ一坐敢
テ仰ギ見ル者ナク恰モ漢高ガ沛ニ歸リタル時ノ如キ觀
アリシト一郡傳ヘテ好話柄トセリ君ノ光榮今日ニ至レ
リト雖モ父政藏君ハ年老ヒテ尙ホ故山ノ舊草廬ニアリ
依々トシテ質素ニ安ンジ弊衣疎服田畝ノ間ニ徘徊シテ
逐牛牧馬ノ業ニ從事セリト是レゾ父君ノ紅塵十丈繁華
ノ地ヲ厭フテ然ルカ、君ノ履歷ハ上來ノ如ク純乎タル
官員仕立ノ人物ナリ未ダ知ラズ是ヨリ政海ニ乘出シテ
自治ノ船ニ浮ブ乎將タ保守ノ城ニ籠レル乎

門脇重雄君

門脇重雄君

慶應元年ノ春徳川氏ノ再ビ毛利氏ヲ撃テ克タザルヤ將
軍偶マ大坂ニ薨シ一橋氏入テ宗家ヲ繼ギタルモ未ダ征
夷大將軍ノ印綬ヲ帶ビザルニ當リ、當時固ヨリ勤王正
義ノ士ナキニアラザルモ三百年間徳澤ノ化スル所、帶
刀者流ノ中ニハ往々幕府アルヲ知テ王家アルヲ知ラザ
ル者アルガ爲メ士族中十ノ七八ハ佐幕黨ニシテ苟クモ
大義ヲ辨知シタル者ノ侃々諤々之ヲ論破誘導スルニ在
ラズンハ當時ノ事未ダ豫知スベカラザル者アリシ故ニ
清人ノ詩ニ所謂ル「叩レ閣哀告九天神。幾箇孤忠草莽臣。
斷盡臣頭臣筆在。尊王終賴讀書人。」ト云ヒン者實ニ虛

門脇重雄君

言ニアラザリシナリ、此ノ人心恟々物情紛々タルノ日ニ當リ佐幕黨ノ首魁ヲ以テ稱セラレタル某藩ノ士某、一日檄ヲ飛バシ大ニ列藩ノ士ヲ京都ノ聖護院ニ會シ自ラ雄辨ヲ揮フテ幕府ノ功德ヲ盛稱シ頻リニ各藩士ノ連署シテ朝庭ニ請フニ將軍受職ノ事ヲ以テセント勸誘セルニ滿坐默然トシテ相目スルノミ更ラニ一言ヲ發スル者ナキニ際レ一人ノ偉丈夫アリ幕地席ヲ起テ猛然トシテ曰ク今ヤ日章ノ旗漸ク光リテ増シ賊徒已ニ干戈ヲ倒シ王權收復ノ機實ニ今日ニアリ咄何物ノ賊子ゾ敢テ喋々佐幕ノ愚論ヲ説クヤト聲色共ニ勵シク衆皆ナ色ヲ喪ナヒ敢テ答フル者ナシ偉丈夫ハ悠然背後ノ一友ヲ顧ミ

門脇重雄君

テ曰ク俗論聞クニ堪ヘズ子ト宜レク東山ノ旗亭ニ向テ一酔ヲ沽フベキノミト袂ヲ拂テ去レリ、此ノ快活ナル偉丈夫ハ何人ゾ是レゾ即チ本編ノ主人公タル重雄君ノ父ニシテ故教部大丞正五位門脇重綾君ナリ君ニシテ此父アリ果セル哉醴泉ノ水、故源ナキニアラズシテ芳蘭ノ花實ニ蓄根アルニ因ルナリ、君ノ家系ハ遠ク平參議教盛公ヨリ出デ世々伯耆國會見郡渡村ノ祠官タリ君ノ幼ナルヤ書ヲ父ノ膝下ニ讀ミ長ズルニ及ンデ鳥取ノ儒士勝部五松ノ門ニ入りテ漢學ヲ修メ家固ト素封ナルヲ以テ君ハ只ダ千萬ノ黄金ヲ擁シテ敢テ國事ニ奔走セザレバ又官祿ニモ奔走セズ家ニアリテ桑ヲ植ヘ金ヲ貸セ

門 脇 重 雄 君

其ノ収獲ヲ採リ其ノ殖利ヲ計リ俗ニ所謂ル焚カズ放ラズノ境界ヲ渡リ村ノ草廬ニ過ゴセシガ明治十八年ニ會見郡ヨリ鳥取縣會議員ニ撰出サレ現今副議長ノ地位ニアリテ議員中ニテ鋒々ノ名ヲ博セリ、君ガ狀貌ノ雄俊ニシテ風度ノ簡貴ナル酷ダ父重綾君ニ似タル者アリト雖モ重綾君ハ快活ニシテ進取ノ氣象ニ富メリ否之ヲ實行シタリ君ハ之ニ反シテ只ダ故山二頃ノ田園ニ戀々トシテ進デ政海ノ難ニ當リテ父君ノ爲ニ倣フ能ハズ是レ二君ノ間ニ存スルノ徑庭ナリ、然リ而シテ君ハ從來政海ニ顔出シタルヲナク國事ニ奔走シタルヲナケレバ其主義ノ如キ素ヨリ之ヲ知ル能ハザリシニ此頃俄然自由

門 脇 重 雄 君

主義ノ旗ヲ西伯ノ天ニ翻セリトノ奇報ハ世人ヲシテ一驚ヲ吃セシメタリ

森田幹君

李康ノ言ニ曰ク「木秀於林風必摧之。堆出於岸流必滿之。行高於人衆必非之。」ト森田君ノ果シテ喬木タルカ高人タルカ余輩未ダ之ヲ知ラズト雖兎ニ角君ハ隨分新聞雜誌社會ニ在テハ相當ニ惡口ヲ書カレタル人物ナリ蓋シ君ガ一昨年十月ヲ以テ彼ノ頓智ノ親玉、滑稽ノ隊長ヲ以テ自任自負シタル今日話記者ヲ告發シテ囹圄ノ苦楚ヲ嘗メシメ以テ言論社會ノ讐敵トナリタレバナリ、世間又君ヲ評スル者一ナラズ褒ムル者ハ曰ク君ハ學者ナリ才子ナリ老練家ナリ信切ナル人ナリト貶スル者ハ曰ク君ハ交際上手ナリ權謀家ナリ籠絡家ナリ情實主

森田幹君

義ノ人ナリト滔々タル天下未ダ玉石ヲ辨スルノ卞和ナキ乎、驥駑ヲ判スルノ伯樂其人ナキ乎、何ゾ夫レ世論ノ一定セザルゾ余輩ノ不明ナル未ダ之ヲ鑑識スルノ明ナキヲ以テ敢テ之ヲ月旦セズ茲ニ君ガ從來ノ形跡ヲ寫來リテ只ダ讀者ハ公評ニ任セントス、君ハ鳥取縣士族ニシテ弘化二年正月ヲ以テ日本海ノ東、蜻蛉洲ノ北濱タル山陰ノ鳥取ニ生ル幼ニシテ機敏學ヲ好ンデ大志アリ長ズルニ及ンデ鳥取藩ノ學舍尙德館ニ昇リテ文武ノ術ヲ修ム明治元年海内ノ兵亂漸ク鎮靜シ文明ノ新空氣將ニ靄々トシテ起ラントスルニ當リ君漢籍ヲ抛テ慨然トシテ曰ク今日ノ時ニ當リ丈夫功名ヲ成スノ地、決シ

森田幹君

テ區々タル孤島ノ中ニ有ラズシテ遙カニ五洲ノ外ニア
 リ而シテ彼ガ國情文物ヲ知ラントセバ彼ノ書ヲ讀ミ彼
 ノ學ヲ講ズルヨリ急務ナルハナシ孔孟ノ書何ゾ讀ムニ
 暇アラシヤト乃チ同年ノ秋ヲ以テ衆ニ先ンシテ單身浪
 華ニ出デ米人ステーブンス氏ニ就キテ英書ヲ學ビ次デ
 神戸洋學館ニ入り箕作麟祥氏ニ從テ只管講學ニ汲々タ
 リシガ明治二年ノ春箕作氏が東京ニ赴クニ及ンデ君亦
 隨行シ同氏ノ家塾ニ入りテ切磋勵精大ニ得ル所アリシ
 ガ全年ノ春海軍兵學寮ニテ生徒ヲ募集スルニ當リ君奮
 然トシテ謂ラク我邦四面皆ナ海環、海軍擴張ハ實ニ今
 日ノ急務ナリ丈夫功名ノ也之ヲ惜テ孰レニカ求メント

森 田 幹 君

直チニ決心入寮シタルニ勃々タル功名心ト酸々タル熱
 心ハ晝夜君ヲ鼓舞シテ一片ノ怠慢心ヲ容ル、ノ餘地
 カラシメタルガ爲メ逐年各科ヲ總ベテ悉ク業ヲ卒ヘタ
 ルガ此際前後數回日本沿海ヲ周航シ時トシテハ飄風ノ
 狂猛ナルニ逢ヒ時トシテハ怒濤ノ洶湧タルニ接シ其他
 暗礁ノ嶮、魚龍ノ害、苟クモ人心ヲ懼レシメ人目ヲ驚
 カシムル者悉ク來テ君ガ浩氣ヲ養フト同時ニ君ガ學
 術進歩ノ好材料トナリシナリ斯クテ君ノ資格既ニ具ハ
 リ羽翼大ニ延ビントスル時ニ當リ不幸ニモ故アリテ孤
 劍飄然衣ヲ拂テ鳥取ノ故山ニ歸リタルニ偶々江藤前原
 ノ争亂、相ヒ前后シテ起リ鳥取ノ士氣モ何トナク騷然

森 田 幹 君

森 田 幹 君

タリシガ君ガ三寸ノ紅舌ト一片ノ赤心ハ勉メテ大義ノ存スル所、大勢ノ赴ク所ヲ論辨シテ鳥取城下ノ不平士族ヲ鎮撫スルニ於テ大ニ與テ力アリシ明治七年ニハ君、鳥取縣廳ヨリ中學校制度改正ノ事ヲ依托サレ、執掌事ニ從ヒタルガ規模計畫其宜キヲ得テ好結果ヲ奏シタルガ爲メ君遂ニ推薦サレテ鳥取中學校長トナリタリ然ルニ偶々日支交渉事件起リ皆曰ク支那伐ツベシ豚尾漢ノ罪宥スベカラズト人心極メテ激昂シ物議紛々タリシガ君此ノ報ヲ聞クヤ唾壺ヲ拍テ曰ク時來レリ時來レリト蓋シ平生鬱勃タル磊塊ノ覺ヘズシテ發露セル者ナリト即日舊藩ノ志士田村貞彦等ト謀リ奮テ上京シ當路者ノ

森 田 幹 君

許可ヲ得タル後郷ニ歸テ同志者ヲ募リタルニ應スル者極メテ多ク一團體ヲ組成スルヲ得テ再ヒ上京シ畫策經營スル所アリシニ該事件ハ干戈ヲ動カスニ至ラズシテ終了シタルヲ以テ時ノ當路者君等ニ勸メテ該團體ヲ解散セシメントシタルニ君可カズシテ曰ク朝ニ之ヲ募テ夕ニ之ヲ解ク是レ士氣ヲ沮喪シ彼等ノ感情ヲ損スル者ナリ若カズ此ノ團體ヲ存置シ平素ニ文武ノ教育ヲ授ケ國家他日ノ用ヲ待ンニハ若シ然ラズシテ強テ俄カニ解散ヲ命ゼバ徒ヲニ彼徒ノ不平ヲ招キ彼等ノ方向ヲ誤ラシムル者ナリト青木冬樹氏等ト共ニ舊藩主池田慶徳侯ニ謁シ君説クニ此事ヲ以テス議論剴切、侯大ニ之ヲ嘉

森 田 幹 君

賞レ直チニ教場設立費トシテ年金三千圓及ビ舊西御館ノ邸舎ヲ貸與セラレ且ツ親ヲ筆ヲ牽キ共立學舎ノ四字ヲ大書シテ下賜サレタリ是實ニ彼ノ一時山陰ニ威名赫々タリシ共立學舎ノ大起因ナリ全八年彼ノ有名ナル民撰議院設立建白ノ議起ルヤ東京銀坐通ナル幸福安全社ニ於テ全國志士ノ大集會ヲ開キタルニ板垣退助君ヲ初メトシテ相會スル者十有余府縣ノ名士俊傑ニシテ君亦其中ニ在リタルガ會員中ヨリ創立委員五名ヲ撰舉スルニ當リ君實ニ撰マレテ其一員タリシ以テ當時該社ニ在テモ君ガ名聲ノ錚々タリシヲ證スベキナリ君爲メニ拮据經營大ニ志サス所ヲ行ハント期シタルニ突然半途ニ

森 田 幹 君

シテ板垣君入閣ノ議起リ爲メニ再ビ君ヲシテ失望セシメタリ一日幸福安全社ニ各地方ノ有志常ノ如ク集會事ヲ議シ居タルニ板垣君突然入り來リ衆ニ向テ報ズルニ自己ノ止ヲ得ズシテ入閣ニ決心シタリトノ一言ヲ以テス君大ニ之ヲ不可トシ極論數回雄辨滔々トシテ論難シタルニ滿場忽チ囂然トシテ大議論ヲ沸騰シ甲難乙批遂ニ君ニ同意スル者十中ノ七八ヲ占メ物議極メテ駭然トシテ其結果未ダ預知スベカラザル者アリシガ該社ノ幹事岡本謙三郎、由利公正ノ二氏漸ク君ヲ慰サメテ其日ハ無事歸宅セシメ翌日ニ至リ二氏力ヲ極メテ調停ニ從事シタルニヨリ君ハ知己ナル本部泰氏ヲ伴ナヒテ板垣

君ヲ築地ノ邸ニ訪ヒ初メテ手ヲ把テ和解スルヲ得タリ、全九年君ハ再ビ山陰ノ舊廬ニ歸リ依然教育ノ事ニ從ヒシガ翌十年ノ春西南ノ役起ルニ及ンデ君大ニ藩中ノ壯士ニ説ク所アリ自ヲ卒先シテ從軍ヲ志願シタルニ政府君ヲ陸軍省出仕ニ任ジタリ君總督本營ノ命ニ依リ新撰旅團ニ附屬シ西郷中將ニ隨從シ海路ヨリ薩摩ニ至リ進デ都之城ニ迫リタルニ賊勢頓ニ挫ケ爲メニ鳥取縣士族ノ從軍ヲ必要トセザルノ場合ニ至リタルニ出仕者中ノ議論ニ派ニ分レ去就孰レトモ決セザリシガ君獨リ出戰論ヲ執テ動カズ奮然トシテ曰ク吾々武官ト爲テ戰場ニ臨ム者死シテ屍ヲ馬骨ニ包ムニアラズンバ勝テ敵

森 田 幹 君

森 田 幹 君

將ノ死屍ヲ看ルヲ待テ退カンノミ何ゾ半途軍ヲ回スノ迂策ヲ執ルベケンヤト衆皆ナ君ノ説ニ從フ是ニ於テ君ハ參謀部ニ入り陸軍省出仕官取締ノ命ヲ蒙リ轉戰シテ可愛嶽ヲ侵シ再ビ轉シテ魔島ニ至リ城内米廩ニ籠ルヲ十余日ナリシガ城山旣ニ陥リ老南洲亦タ斃レ事全ク平ギタルヲ以テ大坂ニ凱旋シ全十月陸軍省出仕ヲ辭シテ歸縣ニ再ビ身ヲ黃卷筆冊ノ間ニ投シ或ハ中學校師範校ノ校長トナリ或ハ縣ノ學務課長トナリテ只管教育ニ熱心シタルハ恰モ戈登將軍ガ太平賊ヲ平ゲテ歸英セルノ當時純然タル宗教家ヲ真似時トシテハ說教師トナリ時トシテハ村夫子ヲ學ビ人ヲシテ武勳ノ赫々タルヲ知ラ

シメザリシト相似タル者アリシト、明治十四年十一月
 鳥取縣再置ニ際シ、汗入會見郡長ニ任シ、米子中學校長ヲ
 兼テ次テ從七位奏任官五等ニ叙シ、全廿年五月邑美法美
 岩井郡長ニ轉シ、二十一年五月自治制度ノ發布セラレ、
 ヤ君、町村制施行委員ニ任ゼラレ、二十二年十二月再ビ汗
 入會見郡長ニ轉任シタリ、余輩未ダ君ガ政治上ノ主義如
 何ヲ知ラズト雖モ君ガ以上ニ經過セル所ヲ以テスレバ
 君モ亦山陰ノ一人傑ナル哉

跋

吾友木村君節堂。夙入大同俱樂部。唱自由之大義。以
 政治改良自期矣。客臘爲列大會遊於阪神之間。結交
 於天下之豪俊。吐露其所抱負。歸後直有此著。是非弄
 文之餘戲。而蓋今日感時事之深情。自不覺而發露。胸
 中萬丈之長虹。直爲傳記爲論說者也。如其著述大旨。
 自叙旣盡焉。僕不敢贅。至其天真爛漫文章奇拔之妙。
 蓋不外得接偉人遊名山之間者矣。讀者莫爲尋常著
 作之觀。則幸甚矣。以爲跋。

國會初期年四月拾有二日

遜處 白田久內 跋

明治二十三年五月九日出版御廬
明治二十三年五月二十四日發行

鳥取縣平民

著作者兼發行者

木村安藏

鳥取縣平民

鳥取縣法美郡御陵村
大字岡益村卅七番邸

印刷者

河邊半三郎

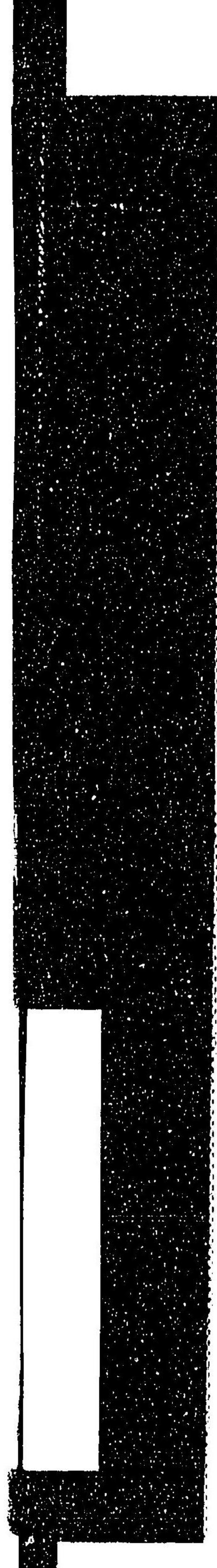
鳥取縣鳥取市東町九
十四番邸日新舎



2000

2000

2000



特 29

677

004119-000-0

特 29-677

因伯名士伝

木村 安蔵 / 著

M 2 3

ACE-0466

